

本校は3つの校歌があります。1つはもちろんおなじみの今の校歌ですが、ほかに旧制中学校の校歌と高等女学校の校歌があります。今回は旧制中学校の校歌の成り立ちについてお話ししましょう。

旧制中学校の校歌は、大正8年（1919）3月に第18回卒業生が卒業記念に贈ったものでした。作詞は詩人・書家で東京女子高等師範学校（今のお茶の水女子大学）教授の尾上八郎（柴舟）、作曲は学習院助教授の小松耕輔です。

- (一) 東の海の夜あけて うねりよる思想の怒涛
大八洲岸をとよもす さめよ さめよ 成邱の健児
- (二) 霊域は不落のとりで 御すがたは降魔の守
葉牡丹の校旗のもとに つどえ つどえ 成邱の健児
- (三) 勤勉と克己と慈悲と 忠勇と剛毅と素朴
盾となし剣となして 立てよ 立てよ 成邱の健児
- (四) すさまじき主義のたゝかひ おそろしき知識のいくさ
国のため勝利の冠 とれよ とれよ 成邱の健児

「大八洲」とは「おおやしま」で日本の国土のこと、「とよもす」は鳴り響かせること、「霊域」「御すがた」とは成田不動尊のことです。1番は、江戸時代以来の孤立状態から文明開化をきっかけにせきを切ったように欧米の文化がおしよせ、まるで混乱状態の日本の現状を示すことで生徒の覚醒を求めています。

音声の代わりに、楽譜を載せておきます。

旧成田中学校々歌

尾上八郎作詩
小松耕輔作曲

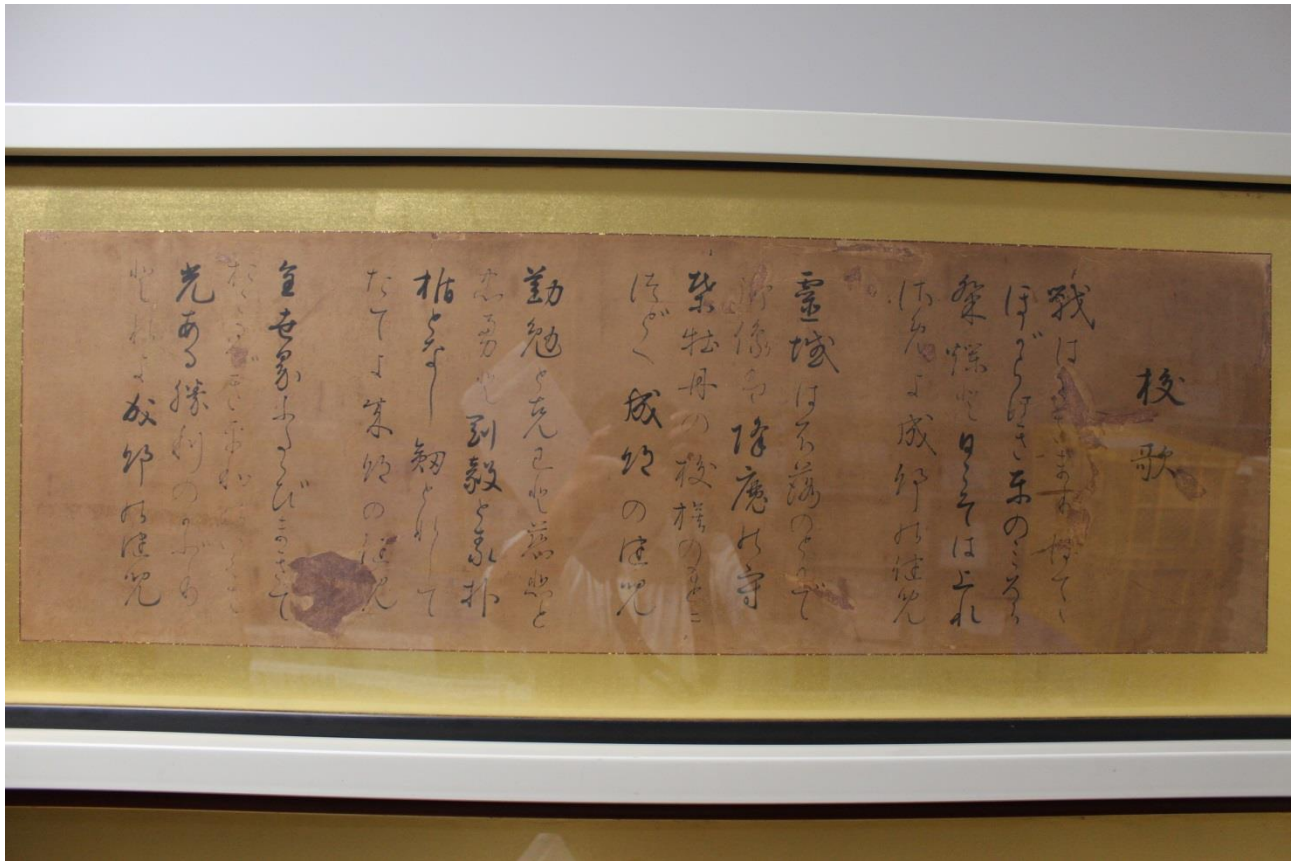
$\text{♩} = 84$

ひんがしのうみのよるあけて
うねりよるしそうのどとーう
ああーやしーまきしをとよもす
きあよさめよせいきゆのけんじ

2番は成田山とのつながりを学校のアイデンティティとし、3番で勤勉・克己・慈悲・忠勇・剛毅・素朴を生徒の身に着けるべき美点としてかかっています。

4番の歌詞の内容を理解するためには、当時の世相を知る必要があるでしょう。大正時代といえば、「大正デモクラシー」という言葉が思い浮かびますよね。これは経済的に成長した市民層が、中産階級と呼ばれる所得層を形成し、政治的な権利を求めようになったことから生まれた運動といえます。人々は豊かになると新聞や本などのメディアを目にするようになり、新しい知識に触れるようになりました。

その結果、政治参加の機会を広げるための普通選挙運動や女性解放運動、労働運動や小作争議、さらには度重なる戦争で重荷となった国家からの解放を求める無政府主義や、今の私たちの想像を絶するような格差社会を根底からくつがえそうとする共産主義が広まりました。また、多様な学問・芸術が発達し、哲学者の西田幾多郎、歴史学者の津田左右吉、民俗学者の柳田国男、医学者の野口英世のほか、森鷗外・夏目漱石・志賀直哉・吉川英治・江戸川乱歩といった作家が活躍しました。一方でラジオ放送や映画が大人気で、大衆娯楽が大いに発展したのです。まさに「すさまじき主義のたゝかひ おそろしき知識のいくさ」の様相を呈していたのです。つまり、そのような状況の中に積極的に飛び込んで、国家のために働くことを4番は求めています。



次にこの写真をご覧ください。この校歌の額は、大正8年に校歌が制定された当時のものです。よく見たら何か変ですよ。

実は1番と4番は、校歌が作られた当時から変更されていたのです。

改訂前の1番は

戦はをさまりはてゝ ほがらけき東のみそら
 燦爛と日こそはのぼれ さめよ さめよ 成邱の健児

4番は

全世界再び捲きて 起こるべき平和のいくさ
 光ある勝利の冠 とれよ とれよ 成邱の健児

1番にある「をさまりはて」た戦いとは、第1次世界大戦のことをいいます。第1次世界大戦は1914年6月末、オーストリアの帝位継承者が民族主義者のセルビア人によって暗殺され、両国が開戦すると、ドイツとロシアが参戦し、さらにフランス・イギリスがロシア側について参戦したことで始まりました。4年余りに及ぶ総力戦で1千万人ほどの死者を出し、疲弊したロシアやドイツで革命がおこり、そのほかの国々でも社会が大きく傷ついてしまいました。その結果、平和が強く求められるようになり、戦後は国際連盟が創設され、1928年には国際紛争を解決する手段として戦争に訴えないことを決めた不戦条約が日本を含む15か国（のち63か国）によって調印されました。また、植民地を求める帝国主義を否定する民族自決の考え方が広まり、旧ロシア・オーストリア・オスマン帝国化の諸民族が独立しました（ただし、アジアとアフリカでは実現しませんでした）。

日本は日英同盟を根拠に開戦の年の8月28日にドイツに宣戦し、11月には中国におけるドイツの根

拠地の青島と山東省の権益を接収し、さらに赤道以北のドイツ南洋諸島の一部を占領しました。さらに、戦後の講和会議でこれらを領有することについて英仏両国の支持を得るために軍艦を地中海へ派遣しました。一方で、これまでに得た権益が、民族自決の気運が高まる中で失われないように、中国に対して二十一カ条の要求をおこないました。さらに、革命直後の内戦下にあったロシアに対して連合国が干渉戦争をしかけたことから、シベリア出兵にふみきりました。その結果、日本は戦勝国となり、戦後の国際社会で大きな影響力を持つようになりました。

ところで、学校ではこの第1次世界大戦の間のことはどのようにとらえられていたのでしょうか。「学校日誌」を見ると、次のようにあります。

八月十七日 月曜日 晴 八四（華氏 84 度、摂氏 28.9 度にあたります）
帝国政府最後之交渉を独之政府ニ通告セルヲ発表セラル

八月二六日 水曜日 半晴 八八
独逸国ニ対シ宣戦ニ付其筋ヨリノ命ニ依ル旨ヲ以テ本県ヨリ注意ノ件来ル

九月一日 火曜日 曇 八六
第二学期始業式举行、日独宣戦詔書捧読ヲ行フ

九月十日 木曜日 曇 八二
本郡ヨリ職員ノ召集有無照会アリ回答、飯倉中尉ニ膠州湾占領ノ壮挙ニ対シ、校友会員一同ノ名ニテ祝辞ヲ贈ル

十一月七日 土曜日 晴 七三（摂氏 22.8 度にあたります）
青島本朝戦闘力ヲ失シ降ヲ我軍ニ申出開城セシ報アリ

「板倉中尉」とは旧中第3回卒業の海軍軍人で、この時は青島攻略戦にいました。ここにあるように卒業生の戦争での戦果を学校をあげてお祝いしていました。こののちはロシア革命や米騒動といった大きな出来事が起こりましたが、そのことについての記述は「学校日誌」には見られません。大正7年(1918)の11月28日に休戦を祝う提灯行列が、翌8年の7月1日にヴェルサイユ講和条約の成立を祝う提灯行列が行われたことを記している程度です。

ちょっとここでよりみち。米騒動は大正7年7月に、富山県の魚津町で起きた、主婦たちによる米の安売りを求める騒動を発端に、全国に広がりました。軍隊が出動するまでになり、9月によりやく沈静化しましたが、寺内正毅内閣は米騒動の責任を取って総辞職しました。急激な米価の高騰の背景には、大戦による好景気でインフレーションになった上、シベリア出兵を当て込んだ米商人による米の買い占めがありましたが、急激な経済発展による人口の都市集中や工場労働者の発展による米の需要拡大という、構造的な問題もありました。

千葉県内では今の鴨川市や鋸南町でも小規模な騒動が起こりましたが、低所得者層の苦境は全国と同様でした。しかし、暴動に発展するようなケースは起こりませんでした。その理由として、千葉県が米

の安売りを強力に進めたこともありましたが、民間での努力もあったのです。

成田の米穀商の田辺権之丞ら数名は8月14日に協議した結果、1人につき5升に限り、時価1升42銭の1等米を35銭で安売りすることを決定しました。また、成田山新勝寺の石川照勤貫首は、救助を必要とする成田町の貧民約120戸の戸主に3円、家族1名につき50銭の救助金を交付することを決めました。ほかにも県内では同様の措置がとられたのですが、これらの施策の結果、県民生活の混乱は沈静化しました（『千葉県の歴史』 通史編近現代2 より）。

歴史を検証する時、ややもすれば起こったことばかりに目を向けてしまいがちですが、「なぜ起こらなかったのか」という視点も大事です。そこには、多くの人々の目に見えない努力があるからです。そんなところにも気づけるようになりたいですね。

第1次世界大戦は時代が大きく変わる節目だったのですが、それが実感されるようになったのは戦争が終わってからのことで、それが校歌の歌詞に反映されたのだと思います。「夜の闇が明けるように、長く暗い大戦が終わって明るい時代がやってくる」として。しかし、平和時代がおとずれたら今度は外交や貿易といった平和のいくさが起ころうとしている」と警鐘を鳴らしているのです。

校歌ができた当時はまだパリ講和会議が継続中でしたが、そこで日本をはじめ戦勝国は、大戦中に得た果実を確実なものにしようと、激しい外交戦を展開していました。特に、戦勝国の立場から中国政府代表団が、二十一カ条の要求の解消を求める主張を展開しましたが、英仏両国を味方に付けた日本の主張が受け入れられたため、中国はヴェルサイユ条約への調印を拒否し、敵国側と個別に講和条約を結んでしのいだほどです（川島真『近代国家への模索』シリーズ中国近現代史②）。まさに「平和のいくさ」ですね。

しかし、しばらくすると歌詞と現実の間にギャップが目立つようになった、ということで、1番と4番が同じく尾上の手で改訂されたのです。大正14年（1925）のことでした。もう昭和は目の前です。この年は日ソ基本条約が結ばれて国交が樹立され、男子普通選挙法が成立したと同時に治安維持法が制定されました。大正デモクラシーの自由主義的な風潮から一転して、次第に日本の「国体」、つまり、大日本帝国憲法を天皇重視で解釈した国家体制が強調されるようになります。だから「勝利の冠」を「国のため」にとることを新しい校歌は求めているのかもしれない。

今回はここまでとします。

（深田富佐夫）